


 書評

尾藤誠司 編

医師アタマ

医師と患者はなぜすれ違うのか？

辻本好子

「異文化コミュニケーション」への新たなエネルギーが湧いてくる

タイトルの斬新さに目を引かれ、つぎに「患者と医師のすれ違いのキーワードは異文化コミュニケーション」とある帯の文字で、時代の変化を実感。10 年以上前、ある学会のシンポジウムで発言した私に、学会長が「深い河はともかく、異文化圏という言葉は医療者に対して失礼ですヨ」と諭すようなご指摘。それが今や「キーワード」なのです。

そして執筆者一覧のなかに、かつてどうにも議論がかみ合わず、心密かに「イシアタマ!」と思ったことのある方々(失礼!)のお名前が。しかし時代の変化とともに「柔らかアタマ」に変身されていました。

うんうんと共感を覚えて読み進むうちに、20 年ほど前、COML を立ち上げるときに何度も相談に乗ってくださった故中川米造先生のお言葉がよみがえってきました。「21 世紀は専門家のカリスマボールが剥ぎ取られる時代。だから医療現場にも新しい患者と医療者の関係づくりが必要になる。がんばりなさい! 」と励ましてくださいました。

COML が 17 年間、4 万件に余る患者や家族からの電話相談に対応するなかで、最近とみに感じる患者の急激な意識変化。誤解を恐れずに言えば、スタート当初に届いた「なまの声」はヨチヨチ歩きの幼子のように。パターンリズム医療に身を任せ、長年受け身に甘んじていた患者が少しずつ目覚め、次第に情報を得ることで自分の気持ちを言葉に置き換え始めました。ところがここ 2~3 年は、まるで思春期・反抗期の頃の自分を見るような「訴え」が目につきます。このまま患者の権利要求だけが高まって、日本の医療崩壊につながるようなことがあってはなりません。この危機をチャンスに、患者が一日も早く思春期・反抗期を卒業し、めざすべきは「自立」「成熟した判断」という果てしな

く遠いゴールです。そこには、正解も完璧もない曖昧な医療に断固と足を踏み入れ、患者とともに歩もうとする医療者の支援が不可欠。7 名の執筆者の熱い想い、戸惑い、そして悩みや迷いといった危機感に共感を覚え、“それでもなお!” の強い意志が伝わってきました。

……諦めなくてもいいんだ……!!

読了後に浮かんだのは、高知空港で胴体着陸した乗客の表情。インタビューに応える 1 人ひとりが、機長とともに戦い抜いた戦友のように誇らしげで、不思議なほど爽やかな顔がテレビに映し出されていました。機長が緊張状況のなかで繰り返し、適宜適切に乗客が安心・納得できる必要な情報をわかりやすくアナウンスし続けて情報を共有。「訓練をしているから安心して乗務員の指示に従って欲しい」と語りかけたことで、乗客も心をつにすることができたに違いありません。満足そうな彼らの表情から、患者が求めているのは「これだっ! 」と確信させられました。

本書それぞれの項を分担する執筆者の、気の毒なほどの歯切れの悪さが、むしろ私には心地よく、医療の限界や不確実性、理不尽なまでの不条理、不合理に誠実に悩み続け、日々進化を遂げようとする姿に映りました。「協働」とは互いの足りなさを補い合う関係づくり。もちろん患者も、そして医療者も決して完璧な人間であるはずもなく、浅井氏の言う「人間的」に接する互いの努力が必要です。本書は悩める医療者の心のうちを知る意味からも、医療者はもちろん、ぜひ患者の立場の方々にも読んでいただきたい。きっとコミュニケーションの努力をしてみようと、新たなエネルギーが湧いてくるに違いありません。

(NPO 法人ささえあい医療人権センター COML 理事長)

● A5 220 頁 2007 定価 2,310 円 (本体 2,200 円 + 税) 医学書院